理想の大地―福地の思想

山田　利明（文学部）

キーワード：洞天福地説、神仙、仙薬、山岳、七十二福地

福地とは、かつての中国で神仙（仙人）になるための修行に最も相応しい土地、あるいは神仙が住む土地として理解された。例えば四世紀初期の『抱朴子』には、華山や泰山あるいは霍（かく）山には正神がおり、山には芝草が生え大難を避けることができる。しかも仙薬を作ることができるだけではなく、有道のものがこの山に登れば山神は必ず福を授ける（金丹篇）という。つまり神が居り福運を与えて不老不死の神仙とする地があるというのである。

唐代になると七十二の福地が選定され、疫癘を避け強い運気をもった地として信仰されるが、それらは全て実際に存在する地であり、架空の大地ではない。ではその地が福地に選定された基準は何か、それを知ることで当時の人々が描いた理想の自然環境を伺うことが出来る。

１．福地ということ

すでに記したように、四世紀初期の葛洪『抱朴子』には、疫疾や災害を避け、神が人々を保護する土地、しかも神仙となるための仙薬を調合するのに相応しい土地としての福地の記事が記される。そこでは、具体的な景観は記されていないが、山神が住む土地というのが前提となる。さらにいえば、仙薬を調合するというのは、その原料となる薬草類が豊富な土地ということになる。神が住み、薬草薬石が多く、疫癘の及ばない大地。これだけでは具体的にその景観を描けないが、それでも肥沃で清らかな水流があり、都会の喧噪から離れた土地であることは想像できる。

この『抱朴子』から五百年ほど後の唐の道士司馬承禎『天地宮府図』に、始めて七十二福地が記されるが、その序に「天元は重疊として気象は参差あり。山洞崇幽にして風煙迅遠なり」という。これはこの書名からも分るように、もとは七十二福地の絵を描いたもの。いまはその絵が失われて文のみ遺された。その絵の説明に、このように万物を生み出す天の力（天元）はいく重にもかさなり合って、大地のもつ気はとぎれることなく流れ来たり、山は高く洞窟（洞天）はほの暗く、風にたなびくかすみは遠く流れるという。描かれた景色は、既にして佳景の境にある。よくよく注意すれば、ものを生む地力（天元）や地気に秀れた地であることも読みとれる。

『抱朴子』のいう山神とは、こうした目に見えない力を指すわけで、それを古代人は神と考えたのであろう。肥沃で地力があれば、当然森林が発達し、禽獣が集る。深い森があれば水害、干害を防ぐ

ことができる。清流や池沼もある。あたかも神によって護られた大地のごとくなる。これが都市から離れていれば、その地は孤立して生計を営むことができる。疫癘から守られるというのは、おそらくそうした孤立性の高い土地であったことを窺わせる。これに佳景が加われば、さらに神々しい土地ということになる。

一方、風水説による土地の良否の判定法も、後漢末期以後徐々にではあるが行われるようになる。周知のように、風水説は大地の中を流れる気の阻通を判定する方法で、気の通路すなわち龍脈上より湧出する気の力によって、富と長寿を得ようとするものである。その大概は、北方に高い山があり東西は比較的なだらかな丘陵、いずれも深い林をもち、南方は開けて水流のある地を局と称して重視する。北方の高山の麓から地気が湧き、この局を覆う。その地気の生気をうける人々は豊かに繁栄する、というのが後の解釈であるが、葛洪とほぼ同時期の郭璞が著したと伝えられる『葬経』では、死者を埋葬する場所の選定法として記される。死者をこのような秀れた地気の湧き出る地に埋葬することで、死者を生気に乗せて快適な死後の生活を提供し、その功徳によって幸運を得るというのである。いずれにしても地気の力によって幸運を得ることに違いはないが、局の選定にはその地形が重視される。北方の主山、東西の丘陵（青龍・白虎）と南の水流は局の典型として理解される。

これに対して、福地には定型的地形がない。それはあくまでも山神の加護にもとづくからで、さらにいえば薬材が豊富な地、修行に相応しい所ということになるからであろう。仙薬の薬種については、植物薬・鉱物薬さらには動物薬に大別される。植物・芝菌類は、森林を主とするから、森の存在を第一に考える。さらに鉱物薬ということになると、岩石の露出した地形になる。そして動物薬としての禽獣の存在も無視できない。『神農本草経』では、神仙になる薬を上薬、長生する薬を中薬、病気を治す薬を下薬とし、上薬には多くの石薬が記される。

『抱朴子』地真篇には、仙薬の調合や修行のために山に入る際、虎狼蛇蝎を避ける護符が記される。山に入るのは、そこに仙薬の材料が存在するからであり、それこそが福地の発想の原点となる。風水上の良地と福地とは、その目的とするところが全く異なるし、その選定の基準も違う。

さて、福地というがそれは洞天と一対になって、通常は洞天福地と称される。洞天とは洞窟内にある神仙の世界である。そこには山があり川が流れ、太陽も月もある別世界で、十大洞天と称される十の大洞天と、小洞天が三十六ある。いずれもいわゆる名山と称される山岳の胎内にあるが、実際に存在するわけではない。しかし全く存在しないかといえば必ずしもそうではなく、そのモデルとなったであろう洞窟はいくつか存在する。それらはカルスト山地の鍾乳洞であり、洞天とはその規模も異なる。この洞窟を神仙世界、あるいは神仙世界に通じるトンネルとしてみたのであろう。もともと、山の胎内に別世界を想定するのは、後漢代頃に出た泰山地獄がある。泰山の山胎に死者世界があるというのである。洞天はこれと全く逆の不死の世界であるが、地上の世界を現実の世とし、地中に別の世界を想定したのは、地表を軸にして一転した世界と考えてよい。現実世界を有限の世界とすれば、もう一つの別世界は無限の世界となる。

三十六の洞天は、道教でいう三十六天説に対応する。道教教理上の三十六天は、最高神元始天尊が

統治する大羅天以下三十五の天上世界を想定するもので、これに対する地上世界として、七十二福地がある。それは三十六洞天の二倍になる。なぜ二倍かといえば、『易経』に陽は一、陰は二とする。陽は天、陰は地、したがって地は天の二倍となる。これは『易』で用いる卦の爻が陽は―、陰は--であるところから、陽を一画、陰を二画としたことから起こったようである。つまり、三十六洞天、七十二福地の根拠はいわば数を合わせただけで、洞窟や福地の実態から出た数字ではない。ただし福地に関していえば、七十二の地を選ぶのにはやはりそれらしい景観と気韻をもった土地が挙げられた。

２．福地の景色

神仙になるための修行地ということを考えると、福地には他地とは異なる特徴的な景観、あるいは神聖な趣が必要となる。例えば七十二福地の筆頭に挙げられる地肺山（司馬承禎『天地宮府図』による。以下同じ。）は、別名茅山である。南京郊外にある南北十キロメートルに及ぶ山塊である。標高は三百七十メートルと高くはないが、この山は四世紀中期に上清経が感得された山として名高く、道教の聖山の一つに数えられる。その意味では、福地の筆頭に置かれるのは当然であるが、同時に神から下された経典を感得した山という強い神験をもつ山として理解されたのであろう。『天地宮府図』では、上清教の大成者「陶弘景隠棲の所」という。確かに平坦な地平に屈曲した山塊がそびえ、深い森をもった山容は東京タワーとほぼ同じ高さをもち、山としては高くはないが、名山というに相応しい姿をもつ。ただ宗教的には著名な道士の旧趾を重視しているようである。

佳景あるいは奇景をもって知られた福地に、第三十二福地の龍虎山、三十七の天柱山、あるいは七十一の盧山などが著名であるが、実は七十二福地中の大半はこの類とみてよい。龍虎山は江西省にあるカルスト台地にあり、石灰岩が赤褐色化した岩肌を露出している。水は澄み奇岩が多いのはこの大地の特徴の一つである。天柱山は安徽省にある名山である。山頂から巨大な岩が突出しており、まさしく天柱を彷彿とさせる。江西の九江にある盧山は天下の名山と称される。ここは道士だけでなく仏僧も六朝以来親しんだ地である。その中でも慧遠は特に有名である。また文人の別荘が多く、当の白易居もここに住んだ。

先に福地は実在の土地と記したが、実は必ずしも実際の地を特定できないものもある。それは、今となってはその地がどこなのか不明なもの、始めから伝説上の地を指したらしいものなどがあるからで、例えば第六の南田山、第七の玉溜山などがそれにあたる。『天地宮府図』には、それぞれ、「第六、南田山、東海の東にあり。舟船往来して到るべし、……」といい、「第七、玉溜山、東海にあり。蓬萊島に近し、上に真仙多くこれに居む。」とある。この場合の東海とは、山東半島から江蘇・福建あたりの沿岸地域を指すようである。そうなると、南田山はどこなのか。玉溜山もよく分からない。三神山説の蓬萊山の近くと解するのか。あるいは台湾の別称である蓬萊を指すのか。ただ、台湾を蓬萊と称するようになったのはいつ頃か定かではない。七十二の東海山も「海州の東二十五里」とある。江蘇省の東といえば海中の島ということになる。これもまた不明といってよい。浙江の寧波沖には舟

山列島があり、これより福建沖の澎湖島に至るまでの間には、大小無数の島があり、特定しがたい。

盧山

茅山

天柱山

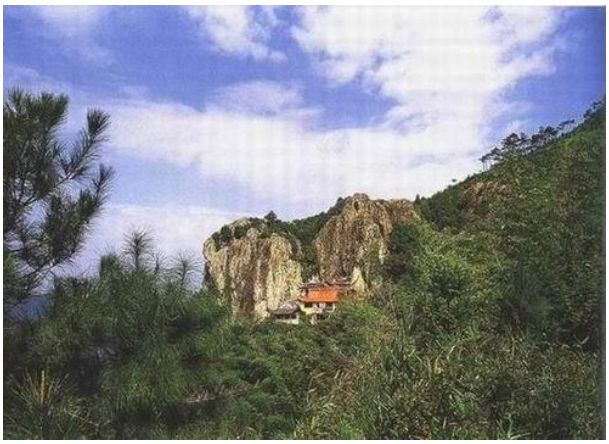
竜虎山

七十二福地のうち、上述した海島とおぼしきものを除くと、山岳を指すのは四十五。その他に峯や渓の字のつくもの、すなわち山地を連想させるものも少なくない。つまり七十二福地というのは、山間に孤立した土地といえる。これは恐らく古い山岳信仰に由来する聖地ということになろうが、中には六朝貴族などが愛好して山荘を建て、その風光を作品に残したために加えられたものもある。

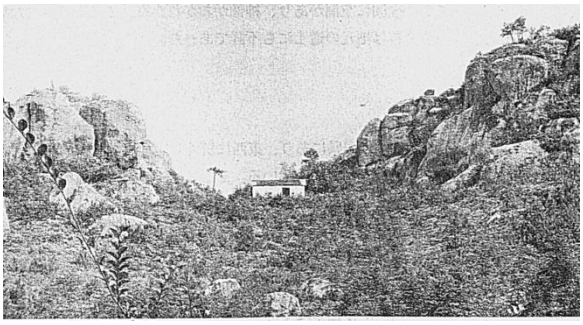
『洞天福地研究』という冊子がある。これは専修大学の土屋昌明教授が文部科学省科学研究費補助金を得て、洞天福地の実地調査をしたその実見記である。二〇一一年から二〇一三年まで毎年一冊ずつ刊行して全三冊の報告誌となっている。いまこれによりながら、いくつかの福地の現状を見てみる。

例えば蓋竹山福地。『天地宮府図』に台州黄山県というが、いまは浙江省臨海市になる。蓋竹山の景観については、『真誥』巻四に茅中君の言として記録されていて、「山の東側には二つの尾根があり、西に上っている。そこには石井橋があり、橋の北にある小道をまっすぐに行くと六本の杉の木がある。木のところから三百歩ほどの所に小さいが深い石室がある。この前に流泉があって……」という描写である。土屋氏はこの記述と同じ光景を現地で確認したと記している。なるほど、掲載された写真を見ても、この山が深い森林をもった山塊であることがわかる。さすがに四世紀の杉の木は見当たらな

かった様であるが、清水の湧出するところを認めるなど、ここが秀れた景観をもった地であると記している（『洞天福地研究』一号）。



蓋竹山



麻姑山丹霞洞（『洞天福地研究』第２）

同じ『洞天福地研究』一号には、麻姑山の丹霞洞も報告されている。これは第十福地として『天地宮府図』に記録されるが、洞窟を指しているわけではないようである。山中の比較的開けた地を示しているという。これも写真で見る限りは奇岩に囲まれた叢原である。奇景といえば奇景ではあるが、それよりもむしろカール状の窪地から天空に抜けるような地形が、この場合は重要なのであろう。一種の天との交感の地という状態である。

福地を写真で見ると、多くの場合麓は古木あるいは灌木とり混ぜて森林として形成されている。おそらく唐代頃はもっと巨木が多く、自然が豊かに残された土地であったように思える。そうでなければ、福地の条件の一つとしての仙薬の調合に相応しい地ではなくなるからである。岩石が露出して佳景奇景を現出している地も多い。これはすでに記したように石薬の探索や採取に有利な条件となる。同じ石薬でも薬効を求めるのではなく、例えば天柱山頂のように天に突出した岩のもつ気力を神仙となって白日昇天する力にかえようとする意図もあったのではないか。

福地というと、ある一定の面積をもった地域と考えられがちだが、調査記録を読んでみると、必ずしも一山全てが福地と考えられていないようである。丹霞洞のように、カール状の谷の部分だけ、あるいは蓋竹山のように石橋を渡って行き泉水のある場所、という。一山の中でも特定の地点が想定されていたようにも思われる。

いずれにしても、こうした報告書や写真を見る限り、福地の殆どはそれなりの景観をもつ。もちろん、わざわざ陰気な土地や腐った葦原を福地とすることはあり得ないから、福地に想定される以上、佳景の地として認められていた地であった。

３．長生へのデザイン

唐代に王屋山の洞天に入って仙を得た人の記録がある。もっともこれは一種の伝奇小説として伝えられるが、当時の人々が洞天や福地をどのように理解していたのかを知る材料ともなるので要点のみを紹介しておく。

唐の咸通壬辰の歳、王屋の県令であった王余は道に志を立て、『黄庭経』を学習してその注釈を作ろうとした。しかし奥義に達していないため、ただ一日に五、六千回ほど誦すだけであった。王屋山には神仙の集る小洞天があると聞き、自ら王屋の県令になったわけである。王余は王屋山中に庵を結び、神仙と出会うことを願っていた。役所をやめてからは穀物を断ち、服気導引などの修行を行うこと数ヶ月、少しづつ精神が明瞭となり体も軽くなった。そこで洞窟の中に入り三十里ほど進んだのである。……その結果ついに王余は長生を得ることになる（『仙伝拾遺』）。

王屋山は十大洞天の第一に挙げられる大洞天である。神仙が集まる仙都があるという。結局、王余はこの洞天で奥義を極め神仙となる。これは洞天の話であるが、福地も同様の効果をもった。先に記した『真誥』の記事には、修行者や神仙が福地に住むという。神仙から仙を得るための秘訣を習い、奥義に達していくということであろう。

山とそこを流れる流水に関心が向けられるのは六朝期になってからである。いわゆる山水画あるいは山水詩は、いずれも六朝期になってあらわれる。王羲之「蘭亭序」に見られる会稽山の光景、宗炳の「画山水序」の山水画論、さらには謝霊運の山水詩、いずれも山のもつ神気を描くことを山水画の、あるいは山水詩の意義とする。「画山水序」にいう、「神（精神）とはもともと捉え難きものであるが、形あるものに宿り、同じ形をもった絵に感応して、その絵の中に真実の姿として入る。したがって、よく実物を描きとれば、その精神を画面につくすことができる」とは、明らかに見るものの神（精神）と山や川の精神との感応を記したもので、一種のアニミズム的世界観にもとづくといえる。六朝の文人の中ではこうした自然観を持った人々が少なくない。謝霊運の詩の中にも、山の神気に出会った瞬間を記したものがあるし、『抱朴子』に至っては山神の存在を前提としている。そうなると有名な天師道徒であった王羲之父子や有力な江南の貴族たちの間にも、アニミズム的自然観はかなり浸透していたとみてよい。福地の思想の根底には、こうした山神との感応と加護とが窺われる。

また宗炳の考え方からすれば、景勝の地には景勝の地を作り上げる美神がおり、醜悪な地にはその景色を作りあげる悪神が住むことになる。したがって福地はいずれも美神によって治められた地であり、この美神によって作られた土地ともいえる。アニミズム的自然観からいえば、佳景、景勝の地にこそ神の居所がある。では一体どのような地が福地に選ばれたのか。その大概についてはすでに記してきたが、とりあげたいくつかの地に共通するのは森林の存在である。同時に清流のあること。山地であること。この景勝ということには、奇景・奇岩の存在も含まれる。これは人為ではなし得ない、むしろ神のみが作り得る造形物として理解された。例えば江西省にある第三十三福地の霊山、それは写真でも分るように麓に森林をもつ岩石の奇峯である。

霊山

すでにこの山容だけでも福地となり得るが、その岩石はすべて花崗岩である。花崗岩の組成は、石英・正長石・雲母が主成分となるが、これらは全て仙薬の薬材となる。麓の森には芝菌類を始めとする植物薬がある。こう考えると確かに神仙への修行場としての条件を備えている。

福地は現実の土地として存在すると先に記したが、それはこうしたデザインをもつ土地を捜したからであって、神話伝説の所産ではない。そこが洞天とは異なるところであろう。実際、七十二福地の過半は浙江・江蘇・安徽・江西・湖南の各省に所在する。いわゆる江南から江西にかけての地域である。この地域の温暖湿潤な気候が森を育てた。豊かな森と清流の流れる岩山に修行の適地を見い出したというべきである。

４．福地とは何か

長生ということを考えると、それは単に長寿を保つだけではない。生きることは、ものを食べ活動し考えることである。神仙のもつ不老長生の質はまさしくこれであり、老いてもなお独立して一人で生きられる力をもつ。そのための不老であり、つねに若々しく活動的でなければならない。しかも長

生してみれば、肉親はすでに亡く友人もいない。一人山中に独居修行したため世の中の変化も知らない。孤独である。それに耐える精神の強さも必要であろう。

仙骨という概念がある。生まれながらにして神仙になり得る性をいう。福地の山野をめぐって仙薬を求め、清静恬淡として精神を錬えて修行に努める。山野を跋渉して仙薬を求めるのは足腰を鍛え体力をつける。無為清静の修行は欲を去り何事にも動じない精神を育む。仙骨がなければ、崖から落ちて死ぬし、修行に耐えられず山を下りる。あるいは病を得て衰弱はなはだしくついには死去する。要するに淘汰されるわけである。残ったものは、強い体力と精神力、それに高い免疫力をもち生きる知恵と運の良さをもった人物ということになる。運という科学的には解明できない確率論を加えるのは、いささか抵抗があるが、一秒差で命を救われた人のいることは確かだし、五秒差で前の人が買った宝くじが一等に当たったというのもある。運が良ければ崖から落ちることはないし、虎や毒蛇に襲われることもない。こうした過酷な生活に耐え残ったものだけが神仙となるのに相応しいが、それでも仙骨がなければ神仙にはなれない。

こう考えると福地の性格はより鮮明になる。つまり神仙淘汰の場なのである。神仙を志す修行者全てに仙骨がない以上、脱落するものが必ずいる。神仙の階位に天仙・地仙・尸解仙という三つの種類がある。天仙は天上世界に昇る神仙、地仙は地上にあって不死を得た神仙、尸解仙は修行未熟にして一旦は死ぬが屍体の外形はそのままに、その本身が仙化する。仙運つたなく修行の中途で死に、屍体のあるものは尸解仙と理解されたし、屍体のないものは先刻まで生活していた洞窟や庵もそのままに、忽然として姿を消して仙去したと解釈される。こうした事例も存在したであろう。なぜなら六朝期の志怪文献や唐代の伝奇文献には、道士達のこうした記事が少なくないからである。

ところでここでは福地を「理想の大地」と標題した。それは神仙信仰にもとづく理想の条件を備えた土地であるからで、通常の人々が生活する場ではない。まして桃源郷ではない。しかし、自然という側面からみれば、森林と清流という景観は一つの理想として位置づけられる。すでに記したように自然に対する認識、特に山水についての注意は六朝頃から興る。それまでの中国文化の中心は、どちらかといえば北方黄土地帯にあった。秦漢は長安、後漢は洛陽、いずれも黄土の大地である。秦漢の長安附近には森林地帯も山岳もあったが、あまり重視されたようではない。三国から六朝になって、北方の貴族・知識人の中で、南に徙ったものたちは、江南の景色に一驚する。そこは緑滴る山や野のある土地であったからである。こうした知識人の中から自然への関心、山水への興趣が出た。福地が江南から江西にかけて多いのも、そうした意識が影響したようである。しかしながらその意識は、必ずしも広くは伝わらなかった。中国の歴史を称して、治乱興亡という。治まれば後に乱れ、王朝が興れば必ず衰亡する。そのたびに都城宮殿は焼れ、また新たな建築が始まる。近隣遠方の森は伐られて山は荒れる。さらに宋代になると、陶磁器の生産が盛んとなって森の木は焼成のための燃料となった。

福地が福地として機能するには、やはり清浄な山水森林が無ければならない。その福地はただ信仰のための存在ではなく、環境としての位置づけにある。

The Ideal Ground—the Idea of the Fortunate Estate

YAMADA Toshiaki

The ground that is suitable for the training to become Taoist ascetic is called, “the fortunate estate 福地.” The idea of the fortunate estate was formed in the period of six dynasties and 72 fortunate estates were selected over the Tang period. The selected grounds are the suitable places for training that really exist.

While the heaven in cavern 洞天、the immortal world made imaginary world in a cave, the fortunate estate exists as an actual training ground. For that reason, woods for gathering medical herbs required for compounding longevity medicine, a strictly shaped mountain for physical and mental training, clear spring water and also a mountain stream were needed.

The ascetic training places seeing to become immortal must be in a real world. And some remote grounds with these excellent landscapes are decided to be named “the fortunate estate.” Here, we try to consider the connection between the meaning and the landscape of the fortunate estate while explaining some present conditions of fortunate estate.

Keywords: the theory of the heaven in cavern and the fortunate estate, immortal, longevity medicine, mountain, 72 fortunate estates